

## 内服薬と外用薬に発生した残薬に対する患者意識の差異

大橋 葉子<sup>1)</sup>、片山 珠季<sup>2)</sup>、前田 守<sup>3)</sup>、長谷川 佳孝<sup>3)</sup>、月岡 良太<sup>3)</sup>、  
森澤 あずさ<sup>3)</sup>、大石 美也<sup>3)</sup>

- 1) 株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 神戸駅前
- 2) 株式会社アインファーマシーズ
- 3) 株式会社アインホールディングス

【目的】残薬削減は、服薬一元管理などで薬局薬剤師が解決に取り組むべき課題のひとつであり、患者のアドヒアランス向上や適正な薬物治療の促進だけでなく、医療保険上の医療費削減にもつながる。そこで本研究では、患者からの聞き取り以外に使用状況の把握が難しい外用薬に着目し、内服薬と外用薬の残薬に対する患者の意識の違いを調査することで、外用薬の残薬削減や適正使用に対して薬局薬剤師がどのように関わるべきかを考察する。

【方法】2018年1月29日～3月31日に当薬局に来局した定期処方薬のある患者に、残薬についてのアンケートを実施した。「残薬」の定義は、内服薬は7日分以上、外用薬は未開封で残ったものとした。残薬ありとの回答者には、調整希望の有無とその理由を追加調査した。

【結果】対象患者260名のうち、23.5%（内服薬32名、外用薬33名、合計61名（重複含む））が「残薬あり」と回答した。そのうち、当日の残薬調整希望者は、内服薬9.4%、外用薬12.1%、後日の調整希望者は、内服薬25.0%、外用薬12.1%、調整希望なしは、内服薬65.6%、外用薬75.8%であった。調整希望なしの理由は、内服薬では「受診日都合での早目受診（52.4%）」が、外用薬では「安心のための予備（48.0%）」が最も多かった。外用薬の残薬は点眼薬が最も多かった。

【考察】本結果から、内服薬は次回受診日までの必要量が把握しやすく、受診日の都合などの環境要因から残薬が発生する患者が多いが、外用薬（特に点眼薬）では次回受診日までの必要量を把握しづらく、次回受診日までに足りなくなることを恐れて予備をもちたいなどの心理的要因から残薬が発生している患者が多くなる可能性が考えられた。したがって、外用薬投薬時には、処方量が何日分に相当するかを明確に指導することも残薬削減につながる可能性が考えられた。

（日本薬学会第139年会（2019年3月，幕張）にて発表）